

会長挨拶

鳩 貝 太 郎

2020年は新型コロナウイルス感染症の拡大により東京オリンピック・パラリンピックが延期となり、4月には緊急事態宣言が出され外出自粛を始め様々な行動が制約されることになりました。その後のコロナ禍の長期化は経済は言うに及ばず、我々の日常生活にこれまでにない大きな影響を与えています。

4月には学校は臨時休業となり、児童生徒は自宅待機となり、先生方は交代で在宅勤務をせざるを得なくなりました。しかし、学校は臨時休業中であっても、先生方は家庭学習を課すことやオンラインによる学習指導や学習状況の把握に努めるとともに、児童生徒の心のケアなどの配慮や家庭で過ごすことのできない子供たちの居場所の確保などに取り組んできました。そのような緊急事態の中でも学校や幼稚園などで飼育されている生き物たちには休業日がありません。毎日だれかがお世話をする必要があります。コロナ禍での学校の動物の飼育はどうなっているのかが心配になります。

小学校の動物飼育に関わっている獣医師さんからは「先生方の中からは、慌ただしく殺気立ったような毎日が続いたが、動物たちの世話をしていると心が癒されて穏やかな気持ちになれた。改めて動物の役割を実感した、という声も聴かれました。」という報告をいただきました。このように先生方や地域の支援者たちによって面倒を見てもらえた動物たちだけではなく、適切な飼育とは言い難いような状況で過ごしてい

る動物たちも少なくないのではないかと思います。

学校は休みでも学校で飼育されている動物たちには休みの日はありません。コロナ禍という厳しい状況が続くからこそ、学校で動物を飼育することの役割、子どもたちへの教育効果を改めて確認し、適切な飼育ができ教育活動に活用できるよう皆さんで知恵を出し合ひましょう。

9月に予定していた第22回全国学校飼育動物研究大会は新型コロナウイルス感染症の拡大が止まらない状況を踏まえ中止せざるを得ませんでした。そのため本研究会の会誌「動物飼育と教育」は研究大会の報告を載せることができなくなり、「生活科を中心とした動物飼育」をテーマに寄稿をお願いして編集しました。小学校では飼育舎での動物飼育が戦前から行われて現在まで続いてきました。しかし、低学年の生活科での動物飼育はこれまでの動物飼育とは異なる配慮が必要ではないかと考えられます。本誌の寄稿論文をお読みいただき、会員間での意見交換や実践研究が進展することを期待いたします。

来年度も9月に研究大会を開催する予定にしています。全国から多くの皆さんが集まり、コロナ後の新しい日常生活の中での学校における動物飼育の在り方を協議できることを願っております。

(本会会長／国立教育政策研究所名誉所員
／東京都立大学客員教授)